

「61クラブ」

一九六〇年前半、日本の有機化学は経験主義で推移していた。理論的予見は少ない。状況を一変させたのは、六三年、教育に情熱を燃やすC・

書 歴 履 の 私

治じ 良りょう 依より 野の

⑦

C・プライス米国ペンシルベニア大教授の来日であった。京大、阪大両大学院生に対して連続講義し、物理有機化学の基礎を論理的かつ定量的に解説した。教官たちにも公開され、世話役の古川淳二京大教授はじめ、主要教授たちも最前列で必死でノートを取

った。助手の私には初めての英語講義だったが「化学の耳」があれば聞き取れた。

世界的にこの流れを決定づけたのが、六五年のR・B・ウッドワード（同年ノーベル化学賞）とR・ホフマン（八一年福井謙一先生と同賞共同受賞）による一連の「分子軌道対称性保存則」の発表であった。その衝撃的な理論は、

まり、野崎研究室の私も特別参加を許された。

一方で古典派の大家の小田良平京大教授と前衛派の堤繁阪大教授がなぜか親密であり、私は部外者ながら親睦野球大会には伊藤嘉彦（後に京大教授）に誘われて加わった。後に阪大工学部を率いる園田昇、村井真二らとも知り合った。これとは別に日本化学界の現

京・阪大の若手人材集う

科学研究費の獲得に尽力

やや難解ではあったが、整然と美しく、底冷えする京都の下宿で繰り返し理解を試みた。まさに心が躍った。

状態を憂う笛野高之阪大教授と櫻井英樹（文化功労者）、田伏岩夫の両京大助教授、いわば青年将校三羽鳥の会にも、引き込まれていた。

新制大学拡張期の京阪両大

六〇年代、化学産業と深く

学の交流は、有為の人材を育てた。若手の吉田善一京大教授、守谷一郎阪大教授の合同セミナーには、阪大から村橋俊一（阪大名誉教授、当時助手）、山本嘉則（東北大副学

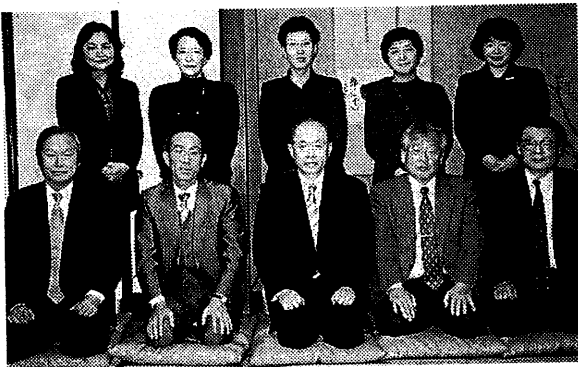
京大で華やかに国際会議を開催し、若者たちを勇気付けた。野副鉄男東北大教授（文化勲

章受章者）一門の非ペンゼン系芳香族化学も日本独自の科学として開花し、向山光昭東工大教授（文化勲章受章者）が気鋭のリーダーとして有機合成化学を率いていた。大学では個々の研究者の発

めた。推進すべき研究領域を設定し、有力な先輩教授に代表者を託して、

の分子科学研究所が、七五年に赤松秀雄初代所長のもとに発足したことを想い起こす。

私たちは三十代後半からささやかながら有機化学分野をとりまとめ、研究費獲得に努めた。推進すべき研究領域を設定し、有力な先輩教授に代表者を託して、



61クラブの面々。左から村井、伊藤、野依、桑嶋、村橋の各夫妻（2000年）

多くの「特定研究」の発足に成功した。

この中核は「61（シックスティワン）クラブ」であり、会員は同じ六一年大学卒業の伊藤嘉彦、桑嶋功、村井真二、村橋俊一、そして私の五人だった。ヒッチコックの映画「裏窓」に、美しいグレイ

想を最大限に尊重すべきだ。しかし、リーダーには責任をもち、自律的に学術の将来の方向を探索してほしい。若き長倉三郎、井口洋夫博士（共に文化勲章受章者）らの熱意が実り、愛知県岡崎市

ス・ケリーがジェームス・スチュワート扮する紳士に、ニューヨークの名門「21クラブ」に連れていってとせがむ場面がある。これにちなんで命名した。一度は訪ねてみたい。（理化学研究所理事長）